

考古資料

鎌倉では、寺社はもちろんのこと、屋敷跡や庶民の暮らす地域と考えられる場所から、当時の人々の営みを伝える多くの資料が出土しており、鎌倉国宝館には国内外の陶磁器や板碑、五輪塔のような人々の信仰を伝える石造物が収蔵されています。

また鎌倉には、山の斜面を掘って造られた「やぐら」が数多くのこされています。やぐらの内部は風雨の影響を受けにくいので、考古資料が良好な状態で保存されることが多く、当時の人々の生活や信仰を知るうえで貴重な情報をもたらしてくれます。



阿弥陀三尊来迎図板碑

鎌倉市指定文化財 海蔵寺蔵 嘉元4年(1306)
総高 103.0 cm

もとは海蔵寺境内の岩窟^{がんくつ}の壁面にはめこまれていた、緑泥片岩製の板碑。碑面には、浄土から阿弥陀三尊が迎えに来る様子とともに、「嘉元四年八月日」の年紀などが刻まれています。来迎図には、亡くなった人が極楽^{ごくらく}往生^{おうじょう}できるようにという願いが込められています。市内では数少ない、図様の刻まれた板碑として重要です。



阿弥陀三尊種子板碑

鎌倉国宝館蔵 正応4年(1291)
総高 150.0cm

浄明寺胡桃ヶ谷やぐらから出土した緑泥片岩製の板碑。阿弥陀如来とその脇に侍す観音菩薩・勢至菩薩の三尊^{しゆじ}が種子^{しゆじ}で表現されています。年紀だけでなく、天蓋^{てんがい}や花瓶^{けびょう}も刻まれ、装飾性にも優れています。碑面には、『観無量寿経^{かんむりょうじゆきやう}』の一文が刻まれており、偈頌^{げじゆ}から、亡くなった人の供養のために造られたことがわかります。



せいじふたつきしのぎもんつぼ
青磁蓋付 鎬文壺

鎌倉市指定文化財 別願寺蔵
中国・南宋～元時代 高 13.5cm

西御門の来迎寺北側にあった太平尼寺跡から、古瀬戸の仏花器と共に出土しました。蓋と壺の胴部分に鎬文があらわされています。中国で盛んに生産され、日本には鎌倉から室町時代にかけて大量にもたらされました。たいへん割れやすく、長い年月の中で破損してしまうことが多いため、本資料のように完形品での出土例は少なく貴重です。



ほうきょういんとう
宝篋印塔

鎌倉市指定文化財 鎌倉国宝館蔵
正慶2年(1332) 総高 93.5cm

宝篋印塔とは、一般に宝篋印陀羅尼と呼ばれる経典を納めた石塔のことをいいます。本塔の伝来の詳細は不明ですが、光明寺の裏山から発見されたとも伝わります。保存状態も良く、塔身の種子は各面に金剛界四仏を見ることができます。基壇の反花の花弁はよく盛り上がり、先端が強く反ることから鎌倉時代の彫技と考えられます。



どうこつざう き
銅骨蔵器
(覚賢塔納置品)

鎌倉市指定文化財
浄光明寺蔵 鎌倉時代
高 7.5 cm～18.2 cm

扇ガ谷の多宝寺跡に建つ約3mの石造五輪塔の納置品です。関東大震災の復旧工事の際に発見され、火葬骨が納められているものもありました。全5基のうち最も大きな骨蔵器には「多宝寺覚賢長老/遺骨也/嘉元四年二月十六日/入滅」と銘が刻まれ、これらは嘉元4年(1306)にととのえられたことがわかります。

五輪塔は覚賢の墓塔で、他の4基については、後に合葬されたものであると考えられます。多宝寺は弘長2年(1262)に忍性を招いて創建した律宗寺院で、忍性は文永4年(1267)には極楽寺に移ります。覚賢はその後に、多宝寺に関わったと考えられます。